

「タミフル」の10代の患者への使用制限が 解除されました

2007年以降、タミフルを服用した中学生が転落死する等の事故が相次いだため、合併症やハイリスクの症例を除いて10代への使用を差し控えるとされてきました。

しかし、インフルエンザ罹患時には、薬の種類や服用の有無に関係なく異常行動が現れるという厚生労働省の研究班の報告に基づき、厚生労働省は「タミフル」については「原則として差し控える」としていた「警告」の記述を添付文書から削除するよう製薬各社に指示しました。ただし、タミフルを含むすべての抗インフルエンザ薬で服用した小児・未成年者が自宅療養を行う場合の注意喚起は継続するとのことです。

第1回院内感染対策研修会が終わりました

9/3から9/13にかけて平成30年度第1回院内感染対策研修会・第1回抗菌薬適正使用研修会を実施しました。今年度より抗菌薬適正使用加算にかかる研修も併せて行うことから、前半はICNによるインフルエンザ対策について後半は薬剤副部長よりAMRについての2部構成となりました。お忙しい中270名を超える職員の参加がありました。参加された方からは「抗菌薬のことについて、きちんと話を聞いたのは初めてで勉強になった」「インフルエンザワクチン株や抗インフルエンザ薬の作用機序について勉強になった」など、おおむね高い評価を頂きました。今年度2回目の研修会も参加された方に満足して頂けるような研修にしたいと思います。

なお、今回参加できなかった職員には近日中にフォローアップテストを配布いたしますので、ご解答の程よろしくお願い致します。



感染ヒストリア

ウィリアム・ウィリスと高木兼寛

「アズーロ」第32号で紹介した英国大使館付きの医師ウィリアム・ウィリスはドイツ医学採用が政府により決定されたことで、1年で東京医学校（現・東大医学部）を辞職に追い込まれました。そこで以前から交流のあった西郷隆盛等の斡旋で鹿児島医学校（現・鹿児島大学医学部）に招かれ、そこで英国医学教育が始まりました。

彼が鹿児島で教鞭を取っていた約7年間で数多くの医師を養成しました。そのなかに後に海軍軍医総監となる高木兼寛がいました。高木は当時国民病として蔓延していた「脚気」の原因説を巡って陸軍軍医の森林太郎（鷗外）と対立していました。ウィリスから学んだ臨床に基づく英国医学に徹した「白米食説」と森林太郎の実験結果に基づいて実際の医療を行うドイツ医学に徹した「細菌説」の対決でした。